

下北方13号墳と同時期、下北方古墳群の位置する宮崎平野の北部、一ツ瀬川流域では祇園原古墳群が最盛期を迎え、百足塚古墳をはじめ、水神塚古墳、機織塚古墳など埴輪採用墳が多数存在するが、形態的に13号墳の埴輪と類似するものはない。

3号墳の詳細が不明な現段階において断言することは難しいが、下北方古墳群では、累代的な、系譜を一にする埴輪生産が行われていた可能性が考えられる。ただし、その中でも13号墳では底部近くにおけるタタキという新出の技法が取り入れられており、古墳群内で保持された埴輪生産も、決して排他的なものではなかったことがわかる。

第2節 下北方の古代瓦

本遺跡では凸面斜格子目叩きの古代瓦片が出土している（第22図125）。わずか1点のみであり、遺構外出土ではあるものの、宮崎市域で確認されている古代瓦は多くはなく、極めて重要な資料である。

現在、宮崎市域では、一ツ瀬川右岸域、海岸部の第2砂丘上、当遺跡の所在する下北方台地上の大きく3箇所において古代瓦が確認されている。

一ツ瀬川右岸の下村窯跡群（佐土原町字東上那珂）は、8世紀後半から9世紀代を中心として操業された瓦陶兼窯である（木村編 1996、竹中編 2008）。凸面縄目叩きによる平瓦が多くを占め、斜格子叩きのものはない。同じ一ツ瀬川右岸域では、隣接する西都市に国衙（寺崎遺跡）や国分寺があり、下村窯は直線距離10km程の位置にあるこれら官衙への供給源のひとつと推定されている。

一ツ瀬川右岸から大淀川左岸まで、宮崎市の海岸部を南北に縦貫する第2砂丘の南端では、「億字石神（現山崎町字下ノ原周辺か）」で古代瓦が出土すると記載されたものがあり（石川 1968）、同じく第2砂丘南端の猿野遺跡で、凹凸両面に縄目叩きを施した平瓦片が1点出土している（鳥枝・久富編 1996）。

下北方台地上においては、本遺跡と下北方5号墳周辺遺跡（金丸編 2008）の発掘調査で古代瓦が出土しており、他に字塚原に所在する景清廟という廟堂周辺畑地での表採資料（長津編 1991）、及び同じく景清廟周辺において、1984年に水道工事の際に出土した資料（第24図）がある。現在までに確認されているのは、平瓦28点、丸瓦1点で、軒瓦はない。全体に土師質のものが多く、須恵質にまで焼き上がっているものはない。一部、側面の角度より一枚作りの可能性が考えられるものもあるが、大方は円筒桶による桶巻き作りと思われる。側面の面取り加工や、凹面側縁近くの段など、側縁付近を二次的に調整するものが多い。凸面文様は一辺7mm前後の格子目叩き、13mm前後の斜格子叩き、及びナデ消しの3種で、縄目のものではなく、量的には格子目叩きのものが最も多い。

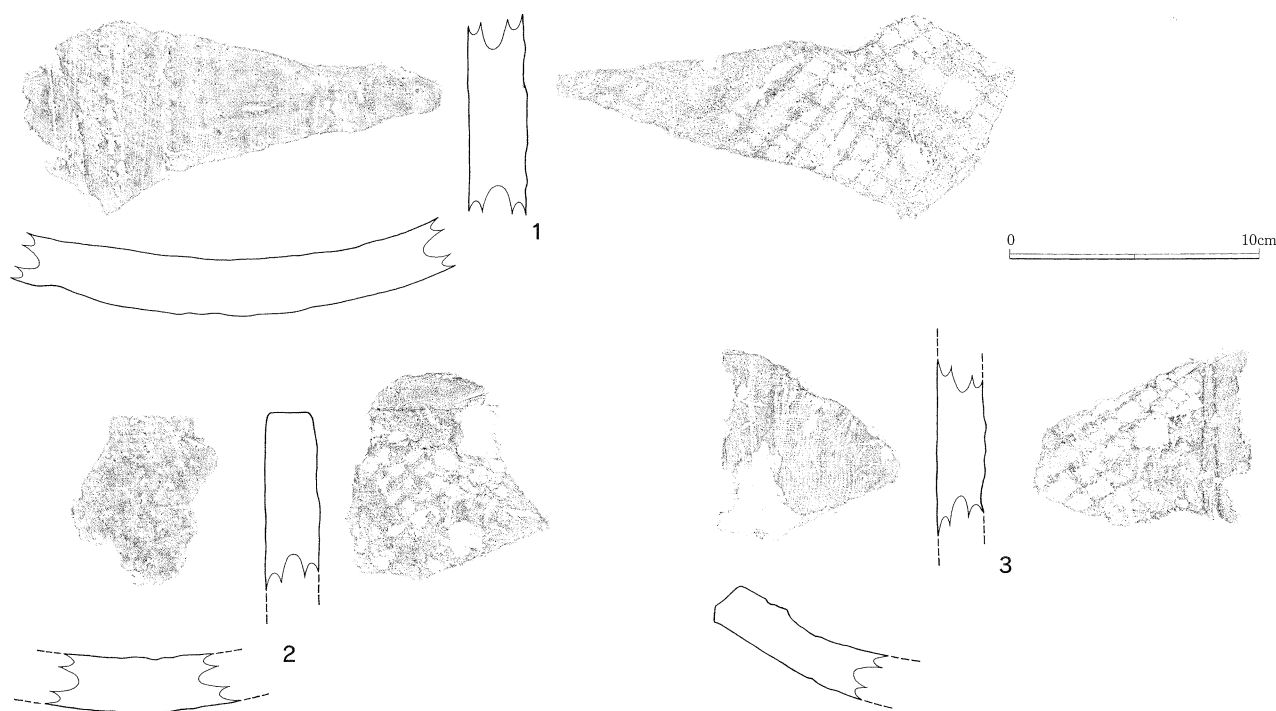
格子目叩きのうち、第24図1の凹面には粘土板の継ぎ目や、細沈線として残る分割突帯の痕が観察でき、また凹面の器面は模骨の痕が見られない平滑な弧を描くことから、円筒桶製である。また凹面の側縁近くに段を持つ3は、側面に2段の面が形成されているが、凸面側の面は製作台上における側面切り落としの際に、凹面側の面は側縁段整形時にそれぞれ形成された面と思われる。

る。凹面側縁における段の内側側面には明瞭な布目痕が確認でき、この部分を含めた布目の残る面の曲率が一定ではないことから、桶巻き作りではなく、一枚作りの可能性がある。ただし先述の下村窯の製品中には、円筒桶から外した後、再度叩き調整を行い、結果として曲率が一定ではなくなっているものがあり、凹面の曲率のみをもって一枚作りと速断することはできない。

現在までのところ明確な遺構に伴って出土したものがなく、正確な時期比定は今のところ出来ない。ただし円筒桶製凸面斜格子の瓦は、大宰府においては8世紀末以降に盛行するとされており（栗原 2000）、下北方台地の瓦も、これ以降の所産ではあろう。また極めて薄弱な論拠ではあるが、瓦を出土した本遺跡と下北方5号墳周辺遺跡では、9世紀台の遺物（土師器、須恵器、陶磁器）が目付き、10・11世紀台の遺物がない。これを援用すれば、下北方の瓦は9世紀台の所産である可能性が高いと言える。

現在、宮崎県内で確認されている瓦窯は先述の下村窯だけであるが、下村窯の製品は凸面縄目叩きを主とし、完全な須恵質に焼き上がるものが多く、下北方の瓦とは明らかに異なる。下北方の瓦は、台地から程遠くない窯場で作られたのであろうが、下村窯の瓦とは製作技法上の顕著な共通点も見当たらないことから、別系統の工人集団の存在が想定される。日向国衙や国分寺では凸面縄目だけではなく、格子目や斜格子叩きの瓦も散見されることから、下北方の瓦は、これら国府、国分寺における瓦制作の一部が導入されたものかと思われる。

では下北方における瓦製作導入の主体は何であろうか。下北方台地上における瓦の出土、採取地点は比較的広範囲におよび、複数の瓦葺建物の存在が考えられる。古代における瓦葺建物として想定されるのは官衙と寺院であるが、台地上には、古く、複数の寺院が存在していたと思しき節がある。台地の南西端に建つ曹洞宗帝釈寺は、現在、台地上唯一の寺院であるが、推古朝開山



第24図 下北方町字塚原 景清廟前出土古代瓦 (Scale : 1/3)

との縁起を持つ。また瓦採取地点の一つである先述の景清廟は、平家の勇将藤原景清の墓を祀ったと伝えられる廟堂であるが、敷地内には複数の墓石があり、元が寺院であったことをうかがわせる。他に沙汰寺という寺のあったという言い伝えや、妙雲山長光寺という地名、寺ヶ迫という字名など、寺院に関する地名、口伝が多く、時代は明確でないものの、台地上には複数の寺院が存在していたかと思われる。

また石川恒太郎氏は、北に丘陵を背負い、南に大河と平野を望む、「天子南面」の地である当地の立地環境の良さや、「宮崎」という地名が、発祥以降、中世末に至ってもなお、当地周辺の地名として用いられていたことなどから、下北方に宮崎郡衙の存在を想定している（石川 1977）。台地上には、神武天皇の仮宮跡、平家の勇将藤原景清の寓居跡などの貴人伝説が残り、古く、権力者が居居していたことを連想させる。これに従い、これらの瓦は郡衙周辺寺院に葺かれていたと想定することも魅力的である。

【参考文献】

石川恒太郎 1968『宮崎県の考古学』吉川弘文館

石川恒太郎 1977「第1章 地形および歴史的環境」（野間重孝編『下北方地下式横穴第5号』宮崎市文化財調査報告書第3集 宮崎市教育委員会）

川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第57号3

金丸武史編 2008『下北方5号墳周辺遺跡』宮崎市文化財調査報告書第68集 宮崎市教育委員会

木村明史編 1996『下村窯跡群報告書』〈基礎資料編〉佐土原町文化財調査報告書第10集 佐土原町教育委員会

栗原和彦 2000「大宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館 研究論集』25 九州歴史資料館

竹中克繁編 2008『下村窯跡群報告書Ⅱ』〈遺物編〉宮崎市文化財調査報告書第72集 宮崎市教育委員会

鳥枝誠・久富なをみ編 1996『萩崎第2遺跡・猿野遺跡』宮崎市文化財調査報告書第30集 宮崎市教育委員会

【挿図出典】

第23図中 下北方13号埴輪：永友良典・津隈久美子編 1990『埋蔵文化財調査研究報告』Ⅲ 下北方古墳－遺物編－ 宮崎県総合博物館